優秀賞 ［留学生の部］

歴史的実例や日本の和の文化を踏まえて、多民族・多文化が共生する日本社会の姿を提示。留学生としての経験に根ざした論調が審査委員の共感を集めました。

多民族、多文化共生社会づくり
――個人のわくわくから共同のわくわくへ

国際ことば学院日本語学校２年
楊 嘉偉 やん じあうぇい（中国）

はじめに

「わくわく」とは一体どういう意味であろうか。調べてみると、「期待」を表すこととも考えられる。戦後60数年が過ぎ、日本は物質的に極めて豊かな国になった。ところが、そんな豊かな社会の中でさえ、多くの人々は満足することができず、不安を抱えながら、「どんな生き方が正しいのか」、「どんな人生を目指すべきなのか」と戸惑っている。若者は、実社会に出れば、金を儲けることが一番大切なことであるかのような風潮さえあるらしい。しかし私は、若者こそ確固たる人生観を持ち、やりがいがある毎日を送るべきだと思う。

「まず自分がわくわくでき、それをまた隣の人々に伝えていったら、全員がわくわく感を持つのではないだろうか」。これを実現することは無理なのだろうか。では、果たしてどうすればわくわくした社会になるだろうか。私は多民族、多文化共生社会をつくるという意見を提案しようと思う。

過去のわくわく社会

かつて人類が初めて月まで行った際、人々はテレビの中継を見ながら、「いつか私も月に行ける」とわくわくした。もちろん、人々が

わくわくした気持ちになるのは、技術開発や先端科学の分野だけにかぎらない。例えば、日本で初めてのオリンピックが東京で行われている間、日本人は開催国として、毎日わくわくしていたようだ。そこで、外国人の私が滞在している日本をかつてのようにわくわくする日本にさせるための方法を考えてみたい。

日本と世界の現状

日本のみならず世界各国は、経済成長の過程で起こっている貧富の格差の拡大、社会保障の質の低下、そして、エネルギーと環境問題の深刻化、さらには少子高齢化など、国の未来を左右する多くの問題に直面している[1)]。

日本の社会変化

日本は先進国だとはいえ、なぜ今わくわくできる日本人が少ないのだろうか。それは、先に述べた様々な問題を抱える中、日本人が自信というものを失っているからではないかと私は考える。かつて日本人の誇りであった経済と国民福祉の充実もこれから崩れるかもしれないという不安があり、また労働力不足などによって、過去の豊かな社会の基礎が崩壊しそうだという心配もある。過去からの安定した社会システムのせいで、若者に新しいことにチャレンジしようという気持ちが少ない。日本人が持っている中流意識も現在の状況を招いたと思う。

過去の日本では、まじめにこつこつと仕事をしていたら、いつかマイホームやマイカーなどを持てる日がくると誰もが考えた。しかしバブル経済崩壊後、日本は難題が相次いで起こった。それでも多くの日本人は、どんな問題でも、日本人であれば、解決のできないことはないと思っていた。もちろん、日本人は不景気を早く終わらせるため、自信を取り戻すため、様々な対策も講じた。最近でも「アベノミクス」という政策も出てきたが、その効果はまだ分からない。

問題解決のための提案

革新的なアイデアが浮かんでこないと、現状を変えられない。現在の日本社会は単一的な文化のため、新たな発想が出てこないと私は考えている。

では、日本はどうすれば新たな発想、革新的なアイデアを生み出せるのだろうか。

そのためには、私は日本社会をグローバリゼーションという世界の傾向、時代の要求に適応させ、多民族、多文化共生の社会に転換させていくべきだと考えている。

確かに、このような社会は社会保障の質

の維持、競争社会を煽るなどの面でマイナスの影響がある。しかし、多民族、多文化共生社会への転換によって、日本人はこれまでに触れていない知恵や知識を知り、自分自身の視野をも広げることができる。さらに、世界中から来た人々とコミュニケーションができるので、日本人が感じている閉塞感も緩和される。また海外から多くの人が定着することで人口も増え、日本人も外に出る機会が増加する。海外からの人材を充分に活用できれば、企業も積極的に新たな社会に適する商品を出し、生産性も向上し、革新的なサービスを開発するだろう。このように再び経済成長が進めば、次第に日本人の収入も増え、次はまた新しい何かをしたいというわくわく感が生まれるはずである。

単一民族の日本

強いて言えば、日本は単一な民族とは言えない。例えば、北海道のアイヌ民族もいる。しかし現在でも、日本人にとって、この国は大和という民族しか存在していないというのが大多数の認識だ。単一の民族の中では偏狭な民族的観点と民族主義が生まれ、他の民族を排斥しようとする傾向が強い。例えば、ドイツの「ゲルマン」民族は自分たちの優越性を感じ、それ以外の民族を低く見た。日本人も大和民族はアジアで欧米の民族に対抗できる唯一の民族と考えた。このような意識では、外国人の受け入れは進まず、極端な場合は戦争にまで発展してしまうのは歴史を見ても分かる。

多民族、多文化共生社会を作るためには、ほかの民族の文化を尊敬すること、理解し合うことが絶対条件である。

過去には「外人」と呼ばれた私たち外国人を、現在以上に受け入れるべきだと思う。それによって、労働力不足の解決だけではなく、人材の拡充にもつながる。

ネットで調べてみると、日本では在留外国人の比率は全人口のわずか1.6%を占めるだけである[2)]。この数字は他の先進国に比べると、ずいぶん少ないのではないだろうか。例えば、オーストラリアとヨーロッパでの在留外国人比率は日本に比べかなり高い。確かに、短期間に多民族、多文化共生の社会へ転換させることは、日本国内の各地に悪い影響をもたらすかもしれない。しかし、多民族、多文化共生のほうが社会に対する多様な提案も出てくるので、長期的には良い影響が表れてくると考える。

共生社会の国

移住者によって作られた多民族、多文化社会を実現したアメリカは、現在、世界のリーダー的存在だ。

しかし、現在でもアメリカでは過去から残った民族の問題もまだまだ深刻だ。なぜだろうか。それは、外国人はアメリカに行っても、ただ自分たちのコミュニティで生活しているからだ。異国では、同国籍、同民族の人々とコミュニティを作り、そこで生活するほうが楽だろう。しかし、私はこのような多民族、多文化社会は理想的であるとは思わない。確かに、言語の問題があったり、差別問題を避けるために、同一民族の移住者がコミュニティを作り、生活しているというのが現状であろうが、私から見れば、どちらも相手のコミュニティにかかわらず、お互いに信頼していないように感じる。このようなアメリカ型の多民族、多文化社会に100%の肯定はできない。

また、アジアの例を見ると、共生社会の手本とできるのはシンガポールだ。シンガポールは歴史的原因、地理的な位置のゆえに、多民族、多文化共生の社会を実現し、異文化と異民族が混じり合う社会を作った。シンガポール政府は民族平等を唱え、各民族がむつまじく暮らすための政策を提案し、文化面では、各民族が各自の文化を維持し続けると同時に、共同の価値観を持つことを重視した。また、教育面では、共通の言葉に英語を選び、各民族のコミュニケーションの問題を解決した。

例に挙げた二つの国または社会は、歴史、地理的な位置、国の規模、産業構造など多くの面で日本とは異なるが、参考にできる点はある。私は、日本はこれからアメリカのような問題を乗り越え、またシンガポールのような社会を参考にした新しいタイプの多民族、多文化共生社会を創ることを提案したい。イメージとしては、日本に来た外国人が同じ国籍、地域の民族でコミュニティを作って暮らすのではなく、例えば職場では、隣の席や持ち場の人が外国人であったり、生活の場では、隣の家や部屋に住んでいるのが外国人で、社会の中では、日常的に日本人と外国人が接触できて、刺激し合うことのできる社会だ。

外国人でも日本社会の一員として考えるべきで、日本の伝統文化、つまり「和」という精神に基づけば、外国人が日本社会の一員になれるのは不可能ではない。

さらに、これは大都市、あるいは、特定の地域だけではなく、地方も含めた日本の全域に広げるべきだと考える。もちろん、私がイメージするような多民族、多文化共生の社会を実現するためには、外国人の就職支援、住宅の提供、子供の教育、社会保障制度を受けられることなど数多くの問題を解決しなければならず、これには日本政府の支えがないと極めて難しい。

留学生として

日本をわくわく社会に変えていくため、われわれのような留学生でもできることはある。

今できることは、「周囲の日本人と協調し、日本人に信頼される外国人になる」ということだ。例えば、アルバイトをする時、地域で生活する時も信頼を得るという意識を持つべきだ。

かつて、留学生の中には、労働力不足という状況に基づいて、アルバイトに精を出す者や卒業後も不法滞在で就労した者も多く見られた。もちろん当初の計画通りに、日本での留学生活を全うし、帰国後、母国で活躍していた人も少なくない[3)]と思うが、留学生の中にはこれからも日本で生活し続けようと考える人もいる。なぜだろうか。

それは、日本で生活する留学生にとって、すでにいろいろなメリットがあるからだ。第一に、留学生の私たちでも、日本に暮らしている間は国民健康保険に加入できるのだ。病気をしても、病院へ行くことができるため、安心して留学生活を送れる。そして、留学生としてアルバイトをする場合は、日本では年金の納付が免除されている。第二に、外国人として大学などで勉強する場合、学費が日本の学生より少ない場合が多く、奨学金の制度も充実している。日本の政府も以前から「留学生30万人計画」という政策によって2020年には外国人留学生を30万人に増やす計画がある。第三に、外国人の就職はまだ壁は高いが、能力があれば就職しやすい国と言える。さらに、子供がいれば、日本の学校で義務教育を受けられ、子育ても心配しなくていい。われわれ現在の留学生は、留学が終わり就職して日本に残った場合、将来、私が提案する多民族、多文化共生社会の一員となっていく。少なくとも私はその意識を持ち、留学生活を続けようと思う。

日本の方々へ

過去の日本には、遣唐使として有名な阿倍仲麻呂という人物がいた。当時、学才を認められ、遣唐使に同行して唐の都長安に留学したことは言うまでもなくご存じの人は多いだろう。阿倍仲麻呂は唐の朝廷で、ある役職に就いた。なぜ唐代には外国人も役人になれたのだろうか。これは参考にできるのではないだろうか。唐王朝が「貞観の治」という政策を行った時代は、長安には世界各国から人々が訪問し、国際色豊かな都市であった。また、皇帝は人材を求めるため、誰でも一律に役人になれる制度があった（科挙制度）。阿倍仲麻呂が役職に就けたのもその一例である。このような歴史的な前例があることを考えると、今の日本なら多民族の社会を作り、国際的な人材をもっと増やすことは可能だと思う。

外国人とはいえども、周りの日本人と助け合いたい気持ちは十分にある。私たちを引き付けるものは日本の文化だけでなく、友好的な雰囲気もそのひとつだ。例えば、私の日本語学校がある静岡市駿河区八幡町では高齢

者が多く、年中行事や祭りの日、防災訓練の日には、人手が足りなくて困っている。そこで、その際にはわれわれ留学生も参加し、自分たちもそれを通して、だんだん日本の文化、日本社会も分かるようになっている。これは教科書では学べない、体で実感できるものだ。

まとめ

過去には貞観の治を行った唐王朝があり、現在にはシンガポールという例がある。

世界はグローバリゼーション化へ進み、一方、日本は過去から他人と協調しようという「和」の精神を持っている。この2つの条件、環境は多民族、多文化共生社会を創るのに有用なものではないだろうか。特に若者は、新しい事物を受け入れられるし、外国人が増えることで、別の世界のことを知り、自分の思考範囲を広めて、斬新的な発想をし、それによって、新たな社会に変わっていく。そこからわくわく感は生まれる。ステップワンは今日本にいる外国人と日本人が、お互いの距離を縮め、理解し合い、助け合うことだ。

多民族、多文化が共生する日本の実現を期待している。

文中注

1) ロバート・J・シャピロ『2020　10年後の世界新秩序を予測する』光文社、2010年
2) 法務省入国管理局「平成24年末現在における在留外国人数について（速報値）」2013年3月18日
3) 上田正昭 編『ハンドブック 国際化のなかの人権問題』明石書店、PP.131、2002年

参考文献

・李勉「新加坡多元文化教育述评」2007年5月22日
・文部科学省「留学生30万人計画」2008年